第13回全日本中国語弁論大会

総合科学部3年生　佐々木美保さん

弁論大会優勝！

去る十一月二十三日㈭、東京・日中友好会館で行われた第十三回全日本中国語弁論大会全国大会で、総合科学部三年生の佐々木美保さんが全国一の栄冠を獲得しました。この弁論大会は、「日本における中国語学習の普及と向上をめざすことを通じて、日中両国の相互理解と友好の増進に貢献する」ことを目的に、十三年前から日中友好協会が主催して開いているものです。

佐々木さんは、広島県で行われた中・四国地区大会で代表に選ばれ、全国大会に進みましたが、日本一になるとは思ってもいなかったようです。全国大会では『二つの出来事から』という題で発表しましたが、中国語の発音が正しく、表現力も豊かで、かつ質疑応答も的確であることが高く評価されました。

『二つの出来事』とは、彼女が昨年の夏、中国に短期（一か月）留学したときに体験した二種類の中国人の日本観を紹介し、日中友好のためにどうすべきかを論じたものです。

一人はタクシー運転手で、「ぼくは日本人を信じているよ」「日本人は礼儀があるから、他の国の人と違ってお金をごまかしたりしない。だから日本人の客は好きなのさ」と発言し、もう一人は車中の老人で、「あなたは日本軍が昔中国で何をやったか知っているかい？　日本の政府は、どうして素直に罪を認めないんだい？」と発言しています。この二つの出来事が、現在の日中両国の関係を象徴していると佐々木さんは考えました。つまり、両国は経済的には友好関係にありますが、中国の普通の老人の本音はそれでは癒されないと。

佐々木さんは以前から中国語を勉強していたわけではなく、大学に入学してから中国語を習い始めたそうです。本人の**やる気**と**いい先生**に巡り会えたことが、今回の好結果となったのでしょう。学生諸君の**やる気**に期待しています。

こだま

うれしい手紙

ミカン山から帰って郵便受けを見ると、手紙が来ていました。一瞬、どなたか知らんと、裏を見れば先日、調査に来られた広島大の学生さんからでした。

七月の暑い日、役場から「蒲刈町の一人暮らしの老人の家にお話に来られるので、協力してください」と知らせが前もってあったのです。その学生さんからのお礼の便りでした。

私は独り居の寂しさから当日の来るのを楽しみに待ちました。家の掃除を丁寧にし、花も飾りました。

三五度もある猛暑の中、その学生さんは案内の方とわが家に見えました。長男の後輩でもあり、他人様のような気がしません。私は独り暮らしの老人の生活やその不安、交遊家族構成などを話したのです。学生さんは優しい人で、いろいろ話してくださって、娘の学生時代を思い出し、楽しい時間を過ごしました。

礼状をもらったうれしさのあまり、早速、お返事を書きました。折り返し、時候見舞いが来て「今、テスト中です。済んだらはがきを書きます。それまで元気でいてください」と優しい言葉を添えて結んでありました。

若い学生さんからの励ましの手紙はほのぼのと心が温まりました。どうぞ、すてきな方と巡り合われ、幸せになってくださいね。

（広島県安芸郡・村本八重子・75歳・農業）

平成7年10月18日付け中国新聞から

ちょっといい話

平成七年は殺伐とした年でしたが、阪神大震災でのボランティアを始め、本学の学生諸君の活躍には心温まるものがありました。

今日は、阪神大震災ほど派手ではありませんが、今一人の広大生を紹介します。本人は当たり前のことをやっているのでしょうが、この投書からはほのぼのとした感じが読みとれます。

これは、十月十八日付けの中国新聞〝こだま〟欄に載ったもので、既にお読みになった方もおられるとは思いますが、同じ大学にいる者として自慢したいという気持ちを抑えられず、再度全文を載せます。